『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』
第４巻第２号　2021（pp.311 - 321）

【特集論文】

児童スポーツ教育学部への思いと実践

久保　健（日本体育大学）

2013 年 4 月に，それまで体育学部１つしかなかった日本体育大学に，2 つ目の学部（児童スポーツ教育学部）が誕生した。この新学部は，従来の日本体育大学女子短期大学部を 4 年生の学部に改組したものであった。

この小論では,その新学部の教育課程を作成する際に参考とした２つの考え方，および新学部における私の教育実践について述べる。

１．新学部の教育課程に 4 年間を貫く演習科目を「基軸科目」として置いた。それは，女子短期大学部の「教養演習」と「総合演習」を発展的に継承したものである。　また同様に,「体験学習」を発展的に継承した「野外活動実習」を導入した。

２．新学部の主目的である「体育指導に強い小学校教育の養成」のために，私の前任校である宮城教育大学の教員養成改革において,「小学校教員の専門性とは何か」を追求した試み（Ａコース教官団，系構想，合同研究室）の成果を盛り込んだ。

３．新学部における私自身の教育実践として，教養科目の「身体とスポーツの文化論」，学科共通科目の「児童の体つくりと動きつくり」，３・４年次のゼミ（児童スポーツ研究Ⅰ・Ⅱ）の一端を紹介した。

キーワード：日本体育大学，児童スポーツ教育学部，女子短期大学部，宮城教育大学，
小学校教員養成改革

The thought and practice on School of Childhood Sport Education

Takeshi Kubo (Nippon Sport Science University)

The 2nd faculty (School of Childhood Sport Education) was born in April, 2013 in Nippon Sport Science University which had only one Department of Physical Education till then. This new faculty reorganized the conventional Woman Junior College department of Nippon Sport Science University to the fourth grader's faculty.

By this short article, when I create the curriculum of a new faculty, I state two matters to which I referred, and my educational practice in a new faculty.

1. I put the exercise subject which pierces through four years on the curriculum of a new faculty as a "standard subject." I put the seminar subject which pierces through four years on the curriculum of a new faculty as a "standard subject." It inherited expansively the "culture exercise" and "a comprehensive exercise" of the woman junior college department. Moreover, I introduced similarly "outdoor activity training" which inherited "experience study" expansively.
2. I introduced some ideas into the curriculum of a new faculty for "cultivation of a primary teacher good at a P.E." which is the main purposes of a new faculty. In teacher training reform of Miyagi University of Education which is my former school, those ideas were results to try (A course instructor team, a connseption of system, a joint laboratory) of having searched for "a primary teacher's speciality nature."
3. I introduced three educational practice of me of a new faculty myself. They are "cultural theory of body and sport", "cultivatin of child's body and movement" and my seminars (child's sport research I-II) .

Key Words: Nippon Sport Science University, School of Childhood Sport Education, Woman Junior College department, Miyagi University of Education, primary teacher training reform,

1. はじめに

2013 年 4 月，それまで 120 有余年にわたって体育学部 1 つで歩んできた日本体育大学に，2 つ目の新しい学部，児童スポーツ教育学部が誕生した。これは，それまでの日本体育大学女子短期大学部（以下,「短大」と略称）を 4 年生の学部に改組したものであった。それから 9 年，日本体育学部にはさらに 3 つの新学部が次々と増設され，5 学部体制となって現在に至っている。

この小論では，その児童スポーツ教育学部（以下,「児スポ」と略称）の新設に一役買い，その後今日まで学部運営，講義等および学生指導に携わってきた者として，筆者の「児スポ」への思いと筆者自身のささやかな実践について書き残しておきたい。

2. 日本体育大学女子短期大学部でのこと（2006 年 4 月～2013 年 3 月）

2006 年 4 月，日本体育大学の「短大」は 7 人の新任教員を一気に迎えた。その中に筆者もいた。このうち,「短大」の改組に伴って「児スポ」に移動し,現在まで残っているのは筆者を含めて 4 人，また，それ以前から「短大」にいた教員で現在まで残っているのは 3 人，合わせて 7 人のうち 3 人が今年度で定年退職するので，残るは 4 人ということになる。

さて,「短大」に着任した筆者の所属は「教養等Ⅱ教職」という名称の研究室であった。このうち「教養」については，もう一つ「教養Ⅰ」という研究室があり，そこに教養科目の英語と社会学を担当する教員が所属していた。また,「教職」は，中学校教員免許（保健体育 2 種）を取得するための教職科目を担当する研究室であり，筆者の他に先輩教員がもう一人いて，その 2 人で「教養」の一部と「教職」にかかわる諸科目を担うことになっていた。

2.1 「短大」での実践

短大で筆者が取り組んだ実践について,（保育科については不正確になるといけないので主として体育科を中心に）述べておきたい。

主な当授業科目は,「保健体育科教育法」であったが，その他に,「教養演習（後に「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」と科目名変更）」「総合演習」「体験学習」などの教養科目,「学習指導論」「特別活動の研究」「教師論」などの教職科目,「事前事後の指導（教育実習）」「スポーツ現場実習」などの実習指導（実習先の訪問は短大教員で分担）も担当することになった。

2.1.1 保健体育科教育法

「保健体育科教育法」は，短大での筆者の唯一の専門分野の授業科目であり，かなり力を入れて授業を行った。それまで 4 年制大学で担当していた「体育科教材研究法」（小学校）と「保健体育科教育法」（中学校）の内容を基に講義内容を組み立てるとともに，毎回の講義で学生から感想・質問等を記入してもらい，そのうち「これは！」と思ったものを B4 の用紙裏表にプリントして翌週に配布し，（「質問」と言ってもなかなか出てこない）学生との交流を図った。しかし，講義内容が短大生に受け止めることのできる内容であったかどうかと振り返ってみると，教員の意気込みと学生の受け止めの間にはかなりギャップがあったようだと反省している。加えて，もうその当時には，短大を出て 2 種の教員免許で教員採用試験を受けても，めったに合格することはできない時代となっていたことが，この科目への学生の意気込みをかなりそいでいたようにも思われる。

教養科目や教職科目など，筆者の専門以外の多くの授業科目を担当することには「素人が無免許運転のように担当してよいものか」とかなり当惑した。しかし，後述するような筆者のそれまでの大学での教員歴からすると，実はそれほどのショックはなかったのかも知れない，と今は思い返している。

2.1.2 教養科目

全員必修の教養科目,「教養演習」と「総合演習」については，短大体育科への 150 名前後の入学者

の大半が体育学部を落ちて第二希望で短大に入学してきた者たちであり，短大卒業後は約８割の学生が体育学部に 3 年編入していたことから，「短大の２年間で，体育学部生に追いつき・追い越せる力の育成をめざすことにした。

「教養演習」（1 年次，通年）はその後「基礎教養ゼミナールⅠ」(前期)と「基礎教養ゼミナールⅡ」（後期）に再編されたので，ここでは再編後の取り組みについて述べる。

「基礎教養ゼミナールⅠ」は，短大教員が全員担当可能な時間割（水曜１校時，前期）に設定し，体育科は６クラス全員がこれを受講し，授業担当はクラス担任，２クラス合併して２人の教員で担当してもよいし,別々にやってもよいことにした。時間割上は１ワクだが，３教室（そのうち１つは全体を集めての授業も可能なように大教室）確保し,多様な形で授業ができるようにした。内容は，初年次教育Ⅰ（オリエンテーション，スポーツテスト，キャリア教育①)，短大のカリキュラムと学び方，志望別履修計画と生活設計，ロングホームルーム①②③，話を聞き・文献を探し・読み・討論し・報告する方法，マナー・礼儀・服装・言葉づかい・スポーツウーマンの品格，日体大と女子短期大学部の歴史と伝統，キャリア教育②③，夏休みの課題「新聞切り抜き特集づくり」などである。

「基礎教養ゼミナールⅡ」（水曜１校時，後期）も同様な形で時間割と教室を設定し,授業担当は「教養Ⅰ」と「教養等Ⅱ教職」の教員があたった。内容は，「新聞切り抜き特集」（夏休みの宿題）の報告と検討，図書館の使い方講習，体育・スポーツ・健康関係の専門雑誌を読んでのレポート報告と検討，テーマを決めての「ミニ研究」と発表などである。

「総合演習」（2 年次，通年）では，体育科の学生を 40 人ずつ 4 クラス・時間割を４ワク確保し，授業は筆者が担当した。内容は，グループでの文献・調査・実験などの研究で，前期は「スポーツ・体育についての文献の購読演習（まず音読し，レポーターが内容を要約し，質疑する)」，後期は「身体と健康についてのテーマを決めての研究と発表」に取り組んだ。

体験学習は，1 年次の必修科目で，富士山周辺の大自然の中で，３泊４日の集団生活の体験を通し，仲間や教員とのふれあいを深めることで，日本体育大学女子短期大学部の学生としての自覚を高めること，また，新入生導入教育の仕上げとして，入学した時の目的・目標や将来のあり方などを再確認し，今後の学生生活に生かし，体育・スポーツや幼児教育・保育の指導者を目指す者としての資質の向上を図ることを目的とした。なお，これは 2009 年からは会場を河口湖周辺に移し，中学校や保育所の見学もプログラムに加えた。この取り組みを通して，筆者は，学生たちが「学習の指導」だけでなく「行動の指導」を通して育つものであることを強く感じた。

2.1.3 教職科目

教職科目については，筆者にとっては専門外の科目なので，やれることしかやれない。「学習指導論」については体育と保健の学習指導論の指導の系統性や集団学習論を他の科目にも広げた。「特別活動の研究」では戦後の学習指導要領におけるこの科目と教育課程上の位置づけを踏まえて，体育行事や運動部指導論，学級指導などについて，にわか勉強をしながら取り組んだ。「教師論」では，これまで共同で実践研究を行ってきた小・中学校教師の実践と生き様を紹介しつつ，必要に応じて現職教員をゲストティーチャー（外部講師）に迎えて授業を行った。

3. 「短大」の再編をめぐる検討⇒「児童スポーツ教育学部」へ

こうした中で,「短大」はこのままでやっていけるのかという不安が生じ,「短大」の現状の再点検と改組を含む改善の方途を考えようという声が高まってきた。

そこで，平成 23 年度第１回日本体育大学女子短期大学部教授会（2011 年 6 月 20 日）に学長から「日本体育大学女子短期大学部の改組のための

特別委員会」を作ることが提案・決定された。そして，半年間の審議の結果が 2011 年 12 月 20 日の短大教授会に答申された。その内容は，短大の現状と問題点を体育科と幼児教育保育科に即して検討し，その解決の可能性についていくつかの選択肢を提示し，小学校・幼稚園教員および保育士の養成と就職をめぐる状況と課題を検討し，また，子どものスポーツ指導者の養成をめぐる情勢と課題についても触れた上で，短期大学部の改組・再編による新学部の設置の可能性について述べたものであった。

この答申を受けて，体育学部と「短大」との合同教授会（2012 年 1 月 13 日）において，「日本体育大学児童スポーツ教育学部設置の趣旨等」についての提案がなされ，その必要性と可能性についてのかなり厳しい審議の結果，提案が了承された。そして，これを受けて，2012 年 3 月 14 日に「短期大学部改組特別委員会」が設置された。

この時点では，翌年 4 月に新学部を設置申請する文科省の手続きは時間切れとなっており，その前途には難題が山積していた。「特別委員会」は，新学部設置申請は「届け出制」で行うこととし（そのためには，新学部の母胎となる体育学部から 6 名以上の教員に移動してもらうことが必要とされた），小学校および幼稚園の教員養成，また保育士養成については課程認定を受ける方向で，新学部の構想づくりと文科省および東京都厚生局に対する設置申請・課程認定の手続きが急ピッチで進められた。

その間の困難と苦労については省略するが，その結果，新学部の設置そのものは 2012 年 9 月にほぼ認められた。しかし，小学校・幼稚園教員養成の課程認定，特にカリキュラム，入試，学生指導体制等については，文科省の 2 つの担当部局（大学設置室，初等中等教育局）との折衝が 2013 年の年明けまで続いた。また，保育士養成校の認定についての東京都厚生局との折衝，さらには幼稚園教員の課程認定と保育士養成校の認定をめぐるカリキュラムのすり合わせも同時に行われていった。

その間の様子は，この時期の短大教授会に「新学部（児童スポーツ教育学部）の設置準備」について 2012 年 9 月から 12 月末までの間に何度か行われた中間報告によく表れている。ここでは，「新学部が 2013 年 4 月に発足することが認められた」としながらも，「ただし，その新学部の教職課程認定およびカリキュラム，入試，学生指導体制等については，なお審査が続」くこと，そしてそれに対応するために，「短大」内に準備プロジェクトを作って作業を進めて行く旨が繰り返し報告されていった。

そうして，2013 年 1 月 16 日の合同教授会で，新学部（児童スポーツ教育学部）の教職課程がようやく認定されて確定したことが報告された。また同時に，日体大としての「児童スポーツ教育学部準備プロジェクト」が正式に発足し，すでに，短大内部で進められていた準備プロジェクトをそのサブ・プロジェクトとして位置づけて作業をすすめることになった。

また，振り返ってみると，短大の改組と新学部の設置申請およびその準備の 2 年間（2011 年 6 月～2013 年 4 月）は，2011 年 3 月 11 日に生じた東日本大震災に対する日体大のボランティア支援活動が続けられる中での取り組みであり，筆者も含めて短大の教員と学生が毎月のように宮城・岩手・福島にボランティア活動に出かける活動と同時併行して行われていた。筆者も，その活動中に大学の事務局から電話で，文科省からの教育課程の手直しの要請に対応するために急遽呼び戻されることが度々あったことが思い出される。

4. 新学部（児童スポーツ教育学部）を構想する際に参考となったもの一宮城教育大学での経験

4.1 小学校教員の専門性とは

新学部は，体育の指導に強い小学校・幼稚園教員・保育士，および子どもへのからだづくりやスポーツの指導のできる地域の働き手を人材として輩出する学部を目指して準備作業が行われた。その際に筆者の念頭にあったのは，筆者の前任校である宮城教育大学（以下，「宮教大」と略称）での

小学校教員養成改革における「小学校教員の専門性とは何か？それをどう育むか？」をめぐる経験であった。

筆者は，1979 年 4 月に宮教大に 28 歳で着任した。この時，宮教大は小学校を中心とした教員養成改革の真最中にあった。この教員養成改革の主導者の一人である高橋金三郎は，小学校教員の専門性をどう育成するかをめぐって，次のように述べていた。

大学生：1 年次から専門の理論も実験も学ぶべき

中学校教員養成課程は「専攻」所属でそれができる（1，2 年時の「教養部」はなかった）

小学校教員養成課程は 3 年から「ピーク」という形で専門性を持たそうとした。

「そうなったら，ピークもない小学校課程の 1，2 年生はどうなるのか，それが問題なのである。入学当初からピークを決めるのは問題の解決ではない。それはひどいごまかしである。」

こうした考え方に導かれた宮教大の教員養成改革は次の 3 つの柱からなっていた。

①教育態勢の改革：A・B 教官団と「系構想」
②学内施設の再配置：A コース「合研」
③入試改革：共通テスト＋7 系入試

4.2 「A コース専任教員」

宮教大学に着任した筆者が所属したのは，保健体育科の教員集団ではなく，「A コース専任教員」という変わった名称の教員集団であった。それまで，宮教大は「課程＝学科目」制をとっており，各々の学科目を背負った教員が中学校教員養成課程の各教科を単位とする教員組織（○○科と呼ばれていた）に所属していた。これに対して，学生は中学校，小学校，幼稚園，障害児などの教員養成「課程」に所属しており，各教員はその所属組織から各「課程」に「出動」する形で講義等を行っていた。しかし，これでは小学校教員養成課程とその指導にあたる教員組織が整合しないので，教員組織を大きく「A コース教官団（小学校課程・幼稚園課程）」と「B コース教官団（中学校課程）」とに分け，前者の教官団に所属する教員を募るとともに，その中核となる教員集団として，折からの小学校教員養成課程の定員増に伴って新たに迎えることになった 10 人の教員を「A コース専任教員」としてその中核にするという構想がたてられたのであった。（この他，障害児教育に対応する「C コース教官団」もあったが，省略）

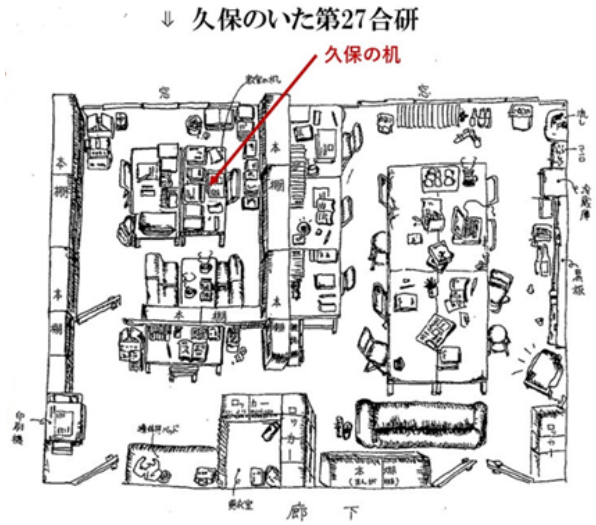
さて，こうしたいきさつで「A コース専任教員」として迎えられた 10 人の教員のうち 9 人までは，いずれもベテランで，一群は小学校教員として経験と実績を積み民間教育研究団体（極地研，数教協など）で活躍していた教員たち，もう一群は演出家，TV の人気番組の作曲家，サル学者，全国的労働組合の理論顧問など，学校教育とは少し異なる学芸の分野からの教員たちであった。

4.3 「合研」（A コース合同研究室）

小学校教員養成課程の学生にふさわしい 1 年次からの「専門」の学習・研究と生活の場として，宮教大では学内施設の再配置を行っていた。即ち，講義棟の 70 人用の教室を「合研」（A コース合同研究室）に作りかえたのである。ここに A コース専任と A コース共感団の中で「手を挙げた」教員が移り住んで，自分の専門分野と「合研」運営についての考え方の看板を掲げる。これに対して学生は自分が面白そうだと思った「合研」を「この指とまれ」方式で選んで入室して 4 年間教員と勉学と生活を共にする。途中で「合研」を変わってもいいし，複数の「合研」に入り浸ってもいい。どの「合研」にも入らなくてもかまわない。ただし，教員と共に，また学生同士でさまざまな自主ゼミを行う事が義務とされた。そうして，学年が進み「合研」のメンバーが専門性を見いだす中で，実にさまざまなことに興味関心を持つ学生たちがハイブリッド化していくことになる。さらに，何年か後に大学院修士課程ができると，ストレートマスターや出戻りの現職教員の院生も「合研」に出入りすることになっていった。宮教大は，こんなやり方で小学校教員養成課程にふさわしい学生

研究室の在り方を模索したのである。

参考のために，筆者が開設していた第 27 合研の見取り図を示しておく。



ここには，机や書棚はもちろん，複写機，水道とガスコンロ，ソファーベッド，ロッカーと着替えスペース,「操体法」の治療用ベッドなどがあり，学生は快適に遊学できるようになっていた。

4.4 「系」構想と実践

教員養成改革が始まるまで，小学校教員養成課程の学生は，3 年次から「ピーク」という名の 12 単位程度の専門科目を取得することになっていた。それを，この改革の中で，「系」（文系，理系，表現系，教育系）という 16 単位程度のまとまりに改め，1 年次から基礎講義・演習を積み上げていくことになった。筆者が主として関わっていたのは「表現系」で，演出家の竹内敏晴さんと共に「からだとことば」「からだと表現」「表現基礎演習」などという，体育科教育を専門とする筆者にとっては「目の眩むような」授業を行いながら，「表現（芸術・体育）系」のカリキュラムづくりを行っていった。また，宮教大には「総合科目」という選択科目があり，その中に「日本の芸能」という授業にも強く誘われ，恐る恐る参加するようになっていった。

4.5 宮城教育大学の小学校教員養成改革への逆流

しかしやがて，こうした宮教大の教員養成改革に対する逆流が生じた。全国に「新構想」を含むたくさんの教員養成大学・課程がつくられ，教員就職率が厳しくなる中で，文科省から「ゼロ免」課程をつくれという方針が示されたのである。そのため，宮教大でも，学生定員を 2 分して「魅力ある」「ゼロ免」課程をつくることになった。そして，その就職先を開拓するために，宮教大の教員たちは，東北中の商工会議所等まわって企業就職先を求めることになったのであった。他方，定員が半減した教員養成課程の方は，小学校教員養成課程と中学校教員養成課程を合わせて，小学校と中学校の教員免許の重ね取りをするということになった。そして，学生は 1 年次から中学校の各教科単位の「専攻」ごとに分けられることになったのである。こうした中で，これまで進めてきた「合研」や「系構想」は，小学校教員養成課程という母胎がなくなってしまったため，その是非を論じることも総括することもないままに，「結果」として消滅してしまったのである。

しかしそれから約 10 年後，今度は文科省から「ゼロ免」課程をなくして元の教員養成課程に戻すか，教員養成学部・学科をやめて別の学部・学科とするか選択せよ，という方針が示された。この時，総合大学の教育学部の中には「教育学部」や「教員養成」の看板を付け替えたところもいくつもあったが，もともと東北大学から教員養成課程だけが分離されて単科の教員養成大学となった宮教大の場合は，もとに戻ることになった。

問題は，その時に宮教大がどういう教育態勢を取ることにしたかである。中学校教員養成課程はほぼ昔の形に戻った。そして小学校教員養成課程は，「系構想」や「合研」を再構築する議論もほとんどないまま，1 年次から各教科を単位とする「専攻」を入試の窓口として受験・入学することになった。実質的には，かつて高橋金三郎の言った「1 年次からピーク制にする」ことになったのである。

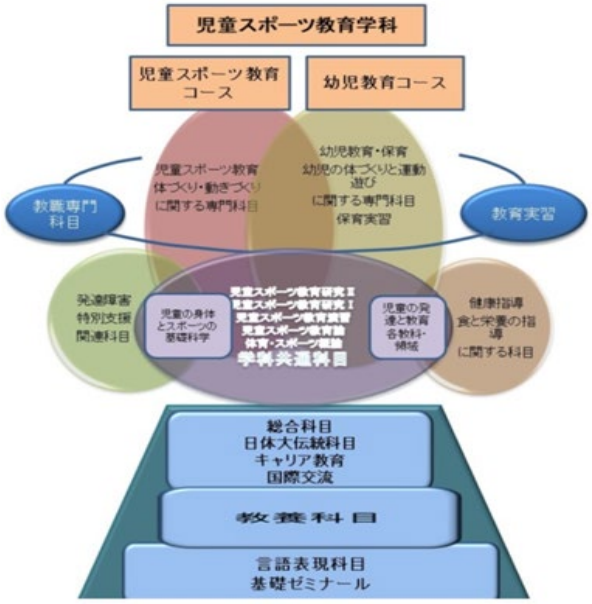
この時筆者は，かつての小学校教員養成改革が勢いをもって行われていた時に，その「改革」に不満を持っていた大学教員（専門研究者）の反動が無言のうちに働いていたことを感じた。そして，自分のこの大学での大きな仕事が終わったとも感

じたのであった。

5. 児童スポーツ教育学部の構想と私の実践

5.1 児童スポーツ教育学部のカリキュラム

2013 年 4 月，日本体育大学の新学部は「児童スポーツ教育学部」(学士の名称も「児童スポーツ教育学士」) ということで出発した。以下にそのときに描いていたカリキュラムの概念図を示しておく。



5.1.1 学部共通科目（25 単位）

1) 基軸科目を 4 年間の履修の柱に

まず考えたのは，1 年次の「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」，2 年次の「児童スポーツ教育演習」，3・4 年次の「児童スポーツ教育研究Ⅰ・Ⅱ」という 4 年間を貫く基軸科目を柱として，すべてのカリキュラムを構造化することである。ここには，筆者が「短大」時代にとりくんだ「教養演習（基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ)」「総合演習」を 4 年間に引き延ばして，最後に祖の総決算として卒業研究に結実させるという思いがあった。

2) 教養科目の名称変更

教養科目については，新学部の特色を強調するという観点から，従来の科目名を「やわらかい」名称に変更した。例えば，「法学（憲法を含む))」を「現代社会と憲法」，「心理学」を「こころと行動の科学」，「社会学」を「変貌する社会と人間生活」というようにである。ただしこれについてはその後，担当教員からの「他学部の同じ内容の講義との整合性がない」という意見により，2019 年度のカリキュラム改訂によって元の科目名に戻ることになった。

付け加えると，この教養科目の中に，筆者も一つ，日体大の児童スポーツ教育学部の特色のある科目を担当してみようということで,「身体とスポーツの文化論」という科目を設けてみた。この科目は，これから児スポで履修する「体育」「スポーツ」「教育」などの諸科目の学習の際の「観かた・考えかた」となることを期待して，次のような観点から内容を設定したものである。

①「身体」を自然的・生物的存在として捉えると同時に文化的存在として捉える。人間は，物体⇒生物⇒動物⇒人間（歴史的・文化的）と発展してきた存在であり，その歩みにおける各層が堆積している。また，人間を「身体を持つ(I have a body)」存在であると同時に「身体である(I am a body)」存在として捉える。

②スポーツはこれまで，フィジカルなもの・肉体的なものととらえられてきたが，同時に，このスポーツを「文化」としてとらえる視点から眺めてみる必要がある。

3) 野外活動実習

「総合科目」の中に必修の「野外活動実習」を設けた。これは，短大の「体験学習」を引き継ぎ，学生は「学習」と「行動」の両輪で育つという観点から，フレッシュマンズキャンプとクラス・学年づくりのための企画，かなりハードな野外活動（登山，自然観察，強足，オリエンテーリング，野外炊飯，キャンプファイヤー）などの内容を盛り込んだ。また，この科目は選択の余地のない必修科目であったため，学生から費用を徴収せず学費で賄うこととした。

その後，この科目は，日体大の実習科目としての共通性および企画・内容の専門性を重視する観点から，A・B・Cの 3 科目から選択する（A・Bは日体大共通，Cは独自企画科目）ことに改訂

①オリエンテーション。からだ(体・身・肉)とは何か？ 文化とは何か？ スポーツとは何か？
学生の考える「スポーツであるもの」と「スポーツではないもの」の変遷
「障がい者スポーツ」から「スポーツとは何か」を考える
③身体・運動の進化①：身体の感覚・動力・制御システムの進化とロコモーションの発達
※映像：NHK「魚たちの上陸作戦」
④身体・運動の進化②：陸上脊椎動物の身体・運動の進化→ヒトの誕生
※映像：ヒトがサルと分かれた日
⑤人間の子どもの身体と運動の発達の特質＝自然的・生物的＝「歴史的・文化的発達」。
⑥日本文化としての身体・運動：立ち居振る舞い。坐り方、労働と姿勢、礼法(小笠原流、武道)
⑦日本人の伝統的な動きと現代スポーツのコラボレーション
ナンバ歩き・走りと100m走・バスケットボール革命
⑧身体の加工：化粧、整形、移植、クローン、ドーピング、サイボーグ化、パラスポーツと義肢・義足。
⑨スポーツの起源と古代ギリシア、ローマのスポーツ。※映像：古代社会のアスリート、ペン・ハー、スパルタカス
⑩中世のスポーツから近代スポーツの誕生へ ：Barbarian、Gentleman & Player
※映像：民衆のフットボール(フットボール禁止令から解禁・奨励へ
⑪オフサイドはなぜ反則か/オフサイドのの現代的展開→バスケットではなぜ反則ではないのか？
⑫「サービス」の変遷：サーブは攻撃的なのになぜサービスと言うのか？
⑬スポーツの現代化・グローバル(世界文化)化とそれに伴う諸問題
大英帝国と植民地(インド)のスポーツ：「このボールを蹴れ」⇔映像：パンジャブの大運動会
⑭オリンピック教育とレガシーの創出
⑮「講義のまとめ」と試験、またはレポートの作成・提出

された。また，費用は選択した科目に応じて学生から徴収することになった。筆者の個人的な思いとしては，この科目の内容は，当初は学部の教員がそれぞれの専門性と素人性を生かしながら作り，次第に学生自身が企画・運営・振り返りをする割合を増やしていこうと考えていたのであるが，それとは逆の方向で改訂されることになった。

5.1.2 学科共通科目（29 単位）

学科共通科目については，前述の 2012 年 9 月から 2013 年 1 月までの文科省との折衝の過程で，一方では大学設置室から（届け出制のため）日体大らしい体育・スポーツに関する必修科目を増やせという要請があり，他方では初等中等教育局から主として教員養成を担う学部として教職科目以外の教育学に関連する科目を増やせという要請があり，それを「基幹科目」の中に設定した。そのため，2 つのコースの専門科目が圧迫されるとともに，卒業に要する単位数を 138 単位にまで膨らんだ。免許・資格科目等も合わせると 160 単位以上を取得して卒業する学生が少なくなくみられるようになった。

基幹科目については，第一に，前述の大学設置室からの要請に応じて，「児童の身体の仕組み」「スポーツ生理学」「スポーツバイオメカニクス」「ライフステージ栄養学」などが全て必修とすることになった。加えて，ここにも「児童の体つくりと動きつくり」という科目を設け，主として筆者が担当することとした。

第二に，教職科目以外の教育学関連科目として，「学校教育論」「現代子ども論」「教材・教具論」という 3 科目を設定した。これらの科目の履修は，学生にとって一定の意義があったと思われるが，担当する教員の負担と内容の専門分野との関連では問題も残った。

第三に，児童スポーツ教育学部の「核」となる科目として，「児童スポーツ教育論」「児童スポーツ指導論」「児童健康教育論」という 3 つの講義科目を設定した。このうち「児童スポーツ指導論」は，当初は講義科目として出発したが，その後，より実践力を身につけさせたいということから，クラスを 50 人程度に分けて模擬授業などを取り入れられるようにした。

5.1.3 コース科目（児童スポーツ教育コース科目）（84 単位）

コース科目については，児童スポーツ教育コースと幼児教育保育コースの単位数のすり合わせに苦労した。幼児教育保育コース科目は，幼稚園教員養成のための教職科目と保育士養成のための専門科目との異動をすりあわせるとほとんどの科目を必修ないしは選択必修としなくてはならなかった。これに対して，児童スポーツ教育コース科目は小学校教員免許取得のための教職科目を必修ないし選択必修にした上で，「体育に強い小学校教員または児童スポーツ指導者」を養成するための専門科目を盛り込む余裕があった。また，ここでは選択で副免許状として幼稚園教員免許も取得できるようにした。

ここでの筆者の担当科目は「初等体育科教育法」と「初等体育」であったが，そのうちここでは「初等体育」の授業について簡単に報告する。この科

目は複数の教員で内容を分けて「陸上運動と器械運動」「ダンスとボール運動」「体つくり運動と保健」の 3 つの授業を用意し，そのうち 2 科目を選択必修とした。筆者はそのうち「体つくり運動」を担当した。次に紹介するのはコロナ禍の下での 2020 年度の授業内容である。

①オリエンテーションとグルーピング：⑴アイヌの唄と踊り①船こぎ遊び、ハーチンナ、⑵ 2人組前向きエレベーター⑶誰の手？（⇒体温の学習）⑷人間知恵の輪

②⑴ アイヌの唄と踊り②イチャリコ ⑵ イニシアティブゲーム①グー・パー、トントン・スリスリ、後出しジャンケン、ステッピングストーン（飛び石渡り） ⑶2人組後ろ向きエレベーター、⑷後ろ向き集団エレベーター

③⑴ アイヌの子どもの唄と踊り③ホイヤーオーホー、⑵ イニシアティブゲーム② （2人組）タコとタイ、（集団）キャッチ、ジャンケン足開き・しゃがみ（集団）キャッチ、Aフレーム並び替え、⑶生きている証拠探し、

④⑴アイヌの子どもの唄と踊り④ウタリオブン、⑵イニシアティブゲーム③新聞紙・日本列島／ 魔法の絨毯 ⑶ 石蹴り／うたケンあんたがたどこさ（1人で、2人で、4人で）仕上げ=4人でのうたケン、

⑤⑴アイヌの子どもの唄と踊り⑤ツバメ ⑵まりつき①集団風船つき・ビーチボールつき⑶紙風船、紙風船を折る⇒イチジク・にんじん・・・⑷まりつき②／お手玉① （片手で2個、両手で3個、どちらか連続7回以上）、⑸イニシアティブゲーム④ バイブライン（勝ち上がり）

⑥⑴アイヌの子どもの唄と踊り⑥バッタ、⑵イニシアティブゲーム⑤フープ渡し・ヘリウムフープ、⑶まりつき③／お手玉② 片手で2個＝連続10回、両手で3個＝両方とも連続10回 ⑷ 頭で立つ逆立ち（ヨーガ・腕で立つ逆立ち）

⑦頭で立つ逆立ちの秘伝書づくり ⇒ 作った秘伝書がレポート。逆立ちの映像撮影

この一部はオープン授業用に映像を作成したので参照していただきたい。

5.1.4 ゼミ（児童スポーツ研究Ⅰ・Ⅱ）

短大では，「総合演習」でそのまねごとをしたとはいえ，卒業研究をさせられなかった事が心残りであった。4 年制の児童スポーツ教育学部では，3・4 年次の 2 年間にゼミ（児童スポーツ研究Ⅰ・Ⅱ）を選んで所属し，各教員の専門に学ぶとともに，最終的には卒業研究に取り組めるようにした。筆者のゼミでは，体育・スポーツ指導の理論学習と実践を往還させる事を目指した。折良く，東京都中央区から本学の SPO を通して「得意スポーツ（スポーツの楽しさ）発見事業」に協力願えないかという要請があり，筆者のゼミでこれに応えることにした。この企画は，中央区で区内の小学生 40 人を募集し，毎年度 6 月から 3 月までの間，長期休業期を除いて毎週水曜日に計 30 回，実質 16:00～17:00 の 1 時間のスポーツ指導を行うものである。筆者のゼミ生は，このスポーツ指導に 5 人ずつ交代で出かけ，指導風景を 4 台のビデオカメラでさまざまな角度から映像に収めてきて，翌木曜日のゼミの時間に，ポイントとなる映像を他のゼミ生に見せながら，指導実践の振り返りと次の週の指導プランの検討を行う。そして同時に，そのスポーツ指導に関する理論学習を合わせて行うというのがゼミの内容である。したがって，筆者のゼミ生は，4 月の年度当初の準備学習から 3 月のまとめ（参加した児童には，学校の「通知表」くらいの分量のある「記録証」を作成して渡した）まで毎週 2 回のゼミ活動を行う事になる。そのため，学生の中では（たぶん）「力はつくかもしれないが，忙しすぎる」という風評が立ち，教員が期待した程にはゼミ生は増えなかった。

中央区のこの企画は，引き継いでくれるゼミ・サークルなどが見当たらなかったために，とりあえず 1 年間お休みということになった。今後児スポの教員が大幅に入れ替わる中で，これを引き継いでくれるゼミ・教員が表れることを期待したい。

5.2 新カリキュラム・新々カリキュラム

2019 年度に，児童スポーツ教育学部が完成年度を迎えたことと，教員免許法が変わり，その「教員養成のモデル・コア・カリキュラム」が文科省から示された事とに応じて，再課程認定を主な内容とする新カリキュラムへの改訂がなされた。その際，2013 カリキュラムを 6 年間実践してみての反省を踏まえた改訂（例えば，必修単位を合理化して卒業単位を 126 単位に減らし，学生の修学を「量より質へ」切り換える）も盛り込まれた。その際に筆者も，個人的な思いで設定した「身体とスポーツの文化論」や「児童の体つくりと動きつくり」などの科目を削除して，「負の遺産」を後に残さないようにした。

現在，ここ数年の間に児童スポーツ教育学部の教員の大幅な入れかえが予定されている中で新々カリキュラムが検討されているが，これからの学部を支える教員のみなさんの力でよりよいカリキュラムとなることを期待している。

6. まとめにかえて

以上，これまで筆者が行ってきたことを振り返ってみると，いかにも「素人芝居」ないし「無免許運転」のような実践と「研究」をやってきたなという感慨を覚えている。と同時に，そういえば小学校教師の教育実践と教育研究も似たような性格を持っているかもしれないとも感じている。さらに言えば，体育科教育学という筆者の専門分野そのものも，体育学・スポーツ科学という学問分野のさまざまな分枝に首を突っ込みながら，それらを子ども立ちの教育に役立てようとしているという意味で，やはり「素人芝居」ないし「無免許運転」のような性格を帯びているのかなとも思うのである。

ともあれ，退職するにあたって，短大時代からその改組と児童スポーツ教育学部の開設に関わり，ささやかな実践も行ってきた者として，現在，入試（志願者減）をはじめ学生のニーズ（学びたいもの,就職先）とカリキュラムのすりあわせなど，ある種の「危機」を抱えている学部の行方について，残るみなさんが「危機」をチャンスに変えて，児童スポーツ教育学部をさらに発展させて行かれることを祈念しつつ，まとめにかえさせていただきたい。

文献

大泉浩一（2003)『教育の冒険―林竹二と宮城教育大学の 1970 年代』本の森.

清眞人編（2004)『「学ぶ」を学びなおす―宮城教育大学合同研究室の軌跡』共同探求通信 22 号，p.105.

久保健（1980)「小学校教員養成の『場』としての『合研』」高橋金三郎『教師の教師たちの学校』評論社，p.33.

付記

本稿は，2021 年 3 月 5 日に行われた「退職者への感謝の会」において，退職者を代表して筆者が行った少し長めの挨拶を文章化したものである。